

幼児の造形における道具を使う技術の習得プロセスと表現について

The process of obtaining skills to use tools in young children's art-making and their expressions

大屋 理香

Rika Oya

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 児童発達臨床学修士課程

キーワード：保育，幼児，造形，表現，技術

Key words : Childcare, Young children, Art-making, Expression, Skill

1. 研究目的

本研究の目的は幼児がどのように造形技術を習得していくのか、そのプロセスを分析し明らかにすることである。本研究では、絵画的表現ではなくモノを作る活動—造形活動—に焦点をあてる。いくつかの道具に絞り込み、その道具の特性に着目しながら造形という造形原理の関係性について技術習得のプロセスを、素材と道具の関わりに着目しながら見ていった。

その結果を踏まえて、造形活動における技術の習得プロセスと子どもの表現の広がりとの関わりについて考察をした。

幼児が絵を描いたりものを製作したりするといった何かを形に表そうとする活動は、通常、保育の分野では、“造形”活動と呼ばれ、表現活動の一部として捉えられているが、ものに直接働きかけ、新たな形を作っていくという点では、他の音楽表現や身体表現とは異なる活動でもある。本研究では、表現という視点からの造形活動だけではなく、より広い意味でのものづくりの原点でもある「造形」の活動として捉えることにした。

2. 研究実施内容

多くの保育士が技術についてどのように幼児に教えたらいいかかわからずにいるという現状がある。5月に「保育学会」に参加し、保育学の分野では幼児の造形と技術の問題をどのように捉えているのかということを知るための貴重な機会となった。保育学においても、絵画についての研究に比べると立体造形の技術習得に関するものは少なく、その原因としては、幼児にとっての造形技術の重要性があまり理解されていないということがひとつ考えられる。

6月に参加した「日本ホリスティック教育・ケ

ア学会研究」からは、幼児の造形活動を考える上でも、心と身体とのつながりを意識したホリスティックなアプローチが有効であるということを学ぶことができた。

昨年から参与観察を行っている保育園にてビデオカメラの台数を増やし、記録を林(1978)の造形原理である切断行為、接合行為に基づき、造形行為ごとに分節化し、どんな目的で子どもがハサミを使おうとするかを意識して観察(山田, 2002, p. 43)し、記録を進めていった。

10月、調査データに基づき、分析考察を進めた。その結果、幼児は多様な素材と関わることで様々な技術習得をしていることが明らかになった。素材の性質によって習得する造形技術は異なることはいうまでもない。たとえば、色紙、ストローで<1回切り>は習得しやすく、クッションシート、ビニール袋で<滑らし切り>は習得しやすい、薄紙、紙コップで<穴空け>を習得するなどである。ビデオ記録を見ると、造形行為に30分以上集中している事例が半数以上あり、その間の会話はほとんど見られず、このことから、幼児は素材と対話することにより新たな技術習得をしているとも言える。

また、指導をせずに個人の造形技術の習得プロセスを見てきた結果、多様な素材と関わることで幼児は素材と向き合い技術を習得し、その技術習得プロセスには7つのタイプがあることが明らかになった。まず、①ひとつの素材に興味を持ち切断、接合行為を繰り返し探索的に技術習得をするタイプ、②ひとつの素材に興味を持ち切断、接合行為のひとつの技術を繰り返し行い技術習得をするタイプ、③様々な素材を見たり、いじったりするうちに技術を試し習得をするタイプ、④様々な素材を見たり、いじったりするうちにアイデアが思いつき、いつの間にか技術習得をするタイプ、⑤

初めからイメージを持ち製作目的があり、多様な素材を切断、接合行為を経て技術習得をするタイプ、⑥他児を模倣する中で技術習得するタイプ、⑦他者、保育者に教わることで技術習得をするタイプである。

また、本研究のビデオ記録を見ると、3歳児でもハサミを器用に使いこなし丸く切る子、4歳児でハートの形を切り抜く子もいた。反対に5歳児でまっすぐ切るのに苦戦している幼児がいた。これは年齢の違いからではなく、同年齢でも差があり、異年齢でも変わらない技術習得段階の幼児がいるということである。造形技術の習得には発達の年齢よりも、ハサミ、糊の道具を使用する経験、頻度が顕著に影響していることが考えられる。つまり、どの保育現場においても、必ずしも全員が高度な技術習得プロセスを一律に歩むわけではないと考えるのが一般的であろう。その進度や至るプロセスは十人十色であり、指導の一般化は難しいと言える。そこで、技術指導を保育者がするかしないかという二者択一の問題としてではなく、ある幼児には自由な素材環境を整え、また別のタイプの幼児には基礎的技術の指導をするといった、幼児一人一人の性格に応じた対応が必要となる。

3. まとめと今後の課題

本研究は、幼児にとって多様な素材と触れ合うことは造形技術習得を促し、その習得した造形技術が表現力や創造性を豊かにすることにつながることを示唆したと言える。保育の場においては幼児ひとりひとりの表現の大切さを強調されても、それを支える造形技術の習得についてはあまり関心が払われてこなかった。本研究の結果は、幼児の造形技術の習得においては多様な素材との関わりというものがきわめて重要であることを示唆し、保育者が幼児の造形と関わる上での必要な視座を提供することができたと考える。

本研究では、造形コーナーに自主的に集まってくる幼児たちが分析対象となっている。従って、製作することを好む意欲的な幼児のみに焦点があたり、製作を好まない幼児や造形コーナーに行きたいが一步を踏み出せない幼児に対しては考慮していない点は、本研究の限界のひとつである。また、今回は多様な素材を造形コーナーに用意したが、多くがハサミで切ることができ、糊で接着可能な紙質のものに限られてい

たということである。次回からは、木材やプラスチックなどの素材を用意して、幼児たちはハサミと糊以外の道具を用いる必要のある素材にどう向き合うのかということも見ていきたい。

本研究は基本的には造形教育の視点に立ちながら、幼児の造形技術の習得プロセスを検討した。幼児の造形技術に関する研究が限られている。その理由には、造形—製作—行為というものが自己表現の延長上のもので捉えられてきたために、<技術>そのものにはあまり関心が払われてこなかったことがある。

本来、造形は内面的な自己表現だけを強調するものではなく、様々な生活に根ざしたものづくりを含むものである。現在では、主に創作的表現活動を意味する art という語の語源も技術一般を示すものであった(金田, 1991, p. 94, 石津, 2018, p. 18)。本研究結果からも、幼児の造形にとって技術的な側面が重要であることは言うまでもないことである。

本研究を通して、幼児の造形活動を従来の表現の領域としてだけでなく、造形教育と技術教育を包含させた新たな視点から捉えないと、幼児の内面的な自己表現という枠の中に留まり、幼児自らが技術を習得する力とその力を創造的に発展させる可能性というものを見逃してしまうということが明らかになった。造形を通して幼児の創造性を育てていくためには、造形を表現のひとつとして見るだけではなく、造形本来のものづくりとしての技術的側面を含めた新たな理念的枠組みの中で検討していくことが必要であり、その検討を今後の課題としたい。

4. この助成による発表論文等

②学会発表

[1]大屋理香「幼児の造形活動における技術習得プロセスについての検討」「第21回家政学関連卒業論文・修士論文発表会」「2019年2月27日」「千葉県、和洋女子大学」

引用文献

- ・金田卓也(1991)美術教育における比較文化的研究、立教女学院短期大学紀要 23, p p. 93-102,
- ・石津珠子(2018)芸術教育論における美的教育について、東洋大学院紀要 14, pp17-25.